

# 『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・ カルパラター』第37章和訳

引 田 弘 道  
大 羽 恵 美<sup>1</sup>

## 解 説

### 1. この物語と捨墮法

本テキスト『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』（以下『カルパラター』と省略。）に説く物語は、3ヶ月間仏陀に謁見できない規則制定の背景として出家用資具の蓄積の問題性を指摘し、その後「ムーカバング物語」へと移行している。この問題は既に平川（1993: 285-288）に指摘されている。平川は「捨墮法第15条 不貼坐具戒」の因縁譚として『パーリ律』（Vinaya, vol. 3, pp. 230-32）<sup>2</sup>での内容を紹介する。

仏陀が3ヶ月間静処に入られ、禪定に集中された。そのため「一人の送食比丘（*aññatra ekena piṇḍapāta-nīhārakena*）を除いて、誰も仏陀と面会できない。もし面会すれば波逸提罪（*pācittiyaṃ desāpetabbo*）に処せられる」という規約（*katikā*）を舎衛城の比丘たちは作った。しかしその間、ウパセーナ（*Upasena*）比丘はこの規約を知らないで、仏陀に面会した。この時仏陀はウパセーナにこの規約のことを知っているかと質問された。ウパセーナは「仏陀によって制定された規約だけは守るべきだが、そうでない舎衛城の比丘が決めた規約はその僧伽だけに適用される。」<sup>3</sup>と答えた。これにより仏陀は「阿蘭若住者、常乞食者、糞掃衣者は随意に来て仏陀と面会することを許す」<sup>4</sup>と定められた。舎衛城の比丘たちも、この仏陀の定めを受け入れた。

その後、他の比丘たちは仏陀に面会しようと、自身の敷具（*santhata*）を捨てて、頭陀支（*dhūtaṅga*）の一部である阿蘭若住支、常乞食住支、糞掃衣住支を受持した。

これとよく似た物語は『根本説一切有部毘奈耶』巻18（大正23、722b-723b）に見る

<sup>1</sup> サンスクリット原典からの和訳は引田が中心に行い、藏訳と絵図の解析は大羽が行った。

<sup>2</sup> 『南伝大蔵経、第1巻、律部1』389-392頁。

<sup>3</sup> *paññāyissati bhante Sāvattihīyā saṃgho sakāya katikāya: na mayaṃ apaññattaṃ paññāpessāma paññattaṃ vā na samucchindissāma yathāpaññātesu sikkhāpadesu samādāya vattissāmā* 'ti.

<sup>4</sup> *ye te bhikkhū āraññakā piṇḍapātikā paṃsukūlikā yathāsukhaṃ maṃ dassānāya upasaṃkamaṇṭū* 'ti.

ことが出来る。ここでは「捨墮法第5条 受非親尼取衣学処」の因縁譚として登場する。

釈迦族は出家しているのに多くの財産があり、衣服も沢山あって、余分の袈裟、鉢、絡囊、腰条を多く貯蓄していた（長衣長鉢、絡囊腰条、並多貯蓄）。世尊は財産を捨てさせようと教えを説いたが彼らは理解しなかった。世尊は「これらの釈迦族は解脱を求めて出家したのに、財産に耽溺して修行に身が入らない。叱責すれば、彼らは悟りを得ないだろう。良い方法で彼らを導こう。」と考えられ、比丘たちに「私は夏安居して3ヶ月間独住するから、誰も私に面会してはならない。ただ一人の食事の世話をする者と、清らかな日を除く。」（我欲於此夏安居。三月之内、宴黙而住。勿令苾芻、輒来見我。除一苾芻、為我請食者、除長淨日。）と告げられた。比丘たちは仏陀の教えを受け、「先の仏の教えを守り、犯せば波逸底迦罪説悔を行わせる。」という規約を制定した（立制）。この間小軍比丘はやって来て世尊と面会した。仏陀は小軍比丘に、この制令に従うべきと言う（然汝不応、違僧制令）。小軍は「自分はこの僧伽がどのような制令を立てているか知らない。」と答え、仏陀が先の規約を述べると、小軍は「自分は客比丘であるから、どのような制令を立てたとしても自分には適用されない。」（我身是客、彼是主人。自立制令、豈及於我。）と言う。これに対して仏陀は、客比丘は初めての寺に入るときには、もとからいる比丘にどのような制令があるかを質問すべきであり、そうしなければ悪作罪を受けると制定される。さらに阿蘭若比丘はこの僧制に従うことを免除され、仏陀に会いたいときは何時でも面会できると決められた。13の頭陀功德と相応する者、即ち糞掃衣人、但三衣人、常乞食人、次第乞食人、一坐食人、鉢乞食人、不重受食人、住阿蘭若人、樹下居人、露処住人、隋処住人、屍林住人、常坐人もまた免除される。小軍に波逸底迦罪説悔を課そうとした六衆比丘も仏陀の定めた免除規定を聞いて、それに従った。

釈迦族出身の比丘たちは、小軍と違って彼らが仏陀と面会できないのは、貪欲さがあるから仏陀に排除されているに違いないと考え、余分の衣や鉢が邪魔だと憎み、それらを阿難に受納してもらおう願う。阿難は仏陀に相談すると、仏陀はそれらを大部屋に置いておくよう説かれ、比丘たちには、欠乏した場合は好きなように取るよう（可為受取、置一大房。並語諸苾芻、若有欠乏資具者、随意取用。）命じられた。

余分な衣を保持することは平川（1993: 57）、佐藤（1963:140）が述べる通り「捨墮法第1条 長衣過限戒」に抵触するものであり、ここでは釈迦族の出家者が高貴の故に多く蓄積していたのを戒めるものである。『カルパラター』の要約は、パーリ律と類似する点はあるものの、『根本説一切有部毘奈耶』の内容とほぼ同じであり、後者のテキストを参照しながら『カルパラター』を編纂したのではないかとさえ推察される。

## 2. 物語の要約

『カルパラター』に説くこの物語を要約すると以下ようになる。括弧内は偈の番号。  
(出家用資具の蓄積の問題性)

出家用資具の蓄えは罪かどうか。(1)

世尊は多くの出家用資具を持った釈迦族の王子たちの出家を非難。(2-5)

さらに、3ヶ月間、比丘たちは釈尊に謁見できないという戒律の制定。(6-7)

阿蘭若修行の誓いを守るウパセーナ比丘は例外的に釈尊に直ちに謁見。(8-11)

阿蘭若比丘は、不要な資具がないから直ちに釈尊に謁見できる。(12-16)

釈迦族の比丘たちは不要な持ち物を捨て、預流果に到達。(17-22)

(ムーカパング物語)

ヴァーラーナシーのブラフマダッタ王と妻ブラフマーヴァティーの間に王子、ウダカが誕生。(23-26)

同時に500人の大臣にそれぞれ一人ずつ500人の息子が誕生。(27)

ウダカ王子、前世で60年間皇太子職に就き、その後地獄で悩まされたことを思い出し、決して皇太子の地位を得て罪を犯さないと決意。(28-30)

王子は王権を継がないため、わざと足が不自由で、口もきけないふりをして「ムーカパング」と呼ばれる。(31-33)

王子にはどこにも欠陥がないことを知った医師たちの忠告に従い、王は彼を恐れさせて言葉を発させようと、彼を不当にも処刑場に送る。(34-36)

王子、途中で最初の謎の言葉「このヴァーラーナシーの地には誰か人が住んでいるのか、いないのか。」を発する。(37-38)

処刑場で死体を見た王子は、2回目の謎の言葉「そもそもこの死体は一体全体生きているのか、死んでいるのか。」を発する。(39)

王子は3回目の謎の言葉「この穀物の集積は食べても、(依然として)食べられるほどある。」を発する。(40-41)

王子は自身が足が不自由でもなく、口がきけないわけでもなく、愚鈍でもないが、皇太子の位に就くことを嫌い、そのようなふりをしたと、王に告白。その理由は前世で、60年間、皇太子位について、6万年の間、地獄の苦しみを味わったことを思い出したからである。王子は出家して、梵行を修することを願う。(42-46)

王、王子の出家を拒否。(47-52)

王子は再度出家の許しを請う。(53-58)

王は王子の意味不明な謎の言葉に対する説明を求める。(59-61)

王子による第1の謎解き。(62)

第2、第3の謎解き。(63-64)

王子、王の許可を得て、森に赴き出家するが、大臣の息子たちの多くの出家用資具の蓄積を見て、目をそらす。(65-68)

大臣の息子たちは資具を捨てると、王子と面会し教えを受ける。(69-74)

過去世と現世の結合。(74)

比丘たちの賞賛。(75)

3. この物語を説く他の文献との比較対応

ところでこの「ムーカパング」(Mūkapaṅgu)に関する物語は、干潟(1978)を参照すれば、以下の文献にも認められる。

(1) パーリの Mūgapakkha-jātaka (Jātaka 538, *The Jātaka*. PTS., Vol. 6, pp. 1-30.)

これに対する日本語訳として、

538 「啞臂本生物語」『南伝大蔵経』

矢島道彦訳「ムーガパッカ前世物語」『ジャータカ全集 9』春秋社、1991. 3-30頁。(=『ジャータカ』)

漢訳では、

(2) 『太子墓魄経』(『六度集経』巻4、大正3、20b-21a) (=『六度』)

(3) 安世高訳『仏説太子墓魄経』(大正3、408b-410a) (=『墓魄』)

(4) 竺法護訳『仏説太子墓魄経』(大正3、410a-411a) (=『墓魄』)

(5) 『根本説一切有部毘奈耶』第19巻(大正23、723c-726a) (=『毘奈耶』)

(6) 蔵訳『根本説一切有部律葉事』(D: kha252a7-257b4, P: ge235a4-ge239b3)<sup>5</sup> (=『葉事』)

これに対応する日本語訳として、八尾 2013: 414-420.

(7) 蔵訳『根本説一切有部毘奈耶律分別』(D: cha89a3-96b3, P: je82a6-je89b6) (=『律分別』)

(1) パーリ『ジャータカ』

- ① パーラーナシーのカーシ王とチャンダー王妃との間に菩薩である王子が生まれる。
- ② 500人の神の子たちが、それぞれ500人の大臣の夫人の間に再生。
- ③ 王子は「雨にぬれながら」生まれたので、「デーミヤ王子」と名づけられる。
- ④ 王子は生まれて一ヶ月経ったとき、自身の前世で国王であったが、その後地獄に堕ちて苦しむ姿を見る。
- ⑤ 女神は王子に足が不自由で、耳が不自由で、口がきけない振りをすれば、地獄の苦しみから逃れられるとアドバイスする。
- ⑥ 16年の間、王は様々な試みで王子の能力を試したが、王子は女神の教えを忠実に守った。
- ⑦ 占い師は王子を死体置き場に捨てて埋めるように進言する。
- ⑧ 御者スナンダが彼を埋めようとする時、王子は立ち上がり、御者に話しかける。
- ⑨ 御者は王子が立って話すのを認識し、彼を連れ戻してほうびをもらおうとするが、

<sup>5</sup> 蔵訳についてはデルゲ版(D)と北京版(P)を参照した。

王子は出家を望む。

- ⑩ 王子は御者に口がきけない振りをした理由として、前世で20年王として国を治め、その後8万年地獄で苦しんだことを話す。
- ⑪ 御者が城に戻って、王子とのやりとりの一部始終を報告する間、王子は出家者の姿をとる。
- ⑫ 王と王妃はやって来て出家者の王子と面会する。
- ⑬ 王は彼を王位に就けようとするが、王子はダルマの説示をする。
- ⑭ 王の出家。
- ⑮ 過去世と現世の結合。

(2) 『太子墓魄経』(『六度』) 先のパーリ『ジャータカ』の番号を基準とし、対応する箇所を述べる。

- ① 波羅奈国。
- ② なし。
- ③ 王子の名前は「墓魄」。
- ④ 王子は知恵があり、過去・現在・未来のことが分かる(生有無窮之明。過去現在、未来衆事、其智無礙。)
- ⑤ なし。
- ⑥ 13年間、口がきけない振りをする(而年十三、閉口不言、有若瘖人。)
- ⑦ パラモン(梵志)は、彼が不吉であり、生き埋めにすれば、必ず別の跡継ぎが出来ると進言。
- ⑦-1なし。
- ⑦-2王子は水辺に行くと身体を洗い、香を身体に塗り、宝服を身につける。
- ⑧ 王子は穴の側に行き、葬儀人(喪夫)に自身が墓魄太子だと言葉を発する。
- ⑨ 葬儀人は国に帰って、王を安心させるよう懇願。王子は葬儀人に彼が言葉を発したと報告するように言う。
- ⑩ なし。
- ⑪ 葬儀人の言葉を聞いた王と王妃は、その理由を怪しむも、大変喜ぶ(靡不悦予)。
- ⑫ 太子を迎えに行く。この時、太子は沙門になることを宣言。帝釈天は苑池樹木を化作し、立派な衣服を袈裟に変える(即去衆宝衣、化為袈裟。)
- ⑬ 父は王位を継ぐよう懇願する(当嗣天位、為民父母。)が、王子は前世の記憶を語る。即ち彼はこの国の須念という名前の王であり、25年間善政をしいていたが、出かける時多くの人たちが従ったので、案内係りの臣下が追い払い彼らに恐怖を覚えさせた(但以出遊、翼従甚衆。導臣馳除。黎庶惶懼。)ので、彼は6万年太山地獄に落ち苦しんだ。そのため今生の13年間口をきけない振りをしたこと、さらに沙門となって無欲

の修行に励みたい（今欲為沙門、守無欲之行。）という希望を伝える。王は彼の修行を許す（即聽学道。）。王子は苦しい修行をして遂に仏となる（慕魄即自、練情絶欲。志進道真、遂至得仏。）。

⑭ 王は出家せず、本国に帰って正しく統治する。

⑮ 過去世と現世の結合。

(3) 『慕魄』 先のパーリ『ジャータカ』の番号を基準とし、対応する箇所を述べる。

① 波羅棕国王。

② なし。

③ 王子の名前は「慕魄」。

④ 自身で前世の様々な善悪を知る（自識宿命、無数劫事。所更善悪、罪福受報、寿夭好醜。）。

⑤ なし。

⑥ 13年間、口がきけない振りをする（年十三歳、閉口不言。）。

⑦ バラモンは捨てて生き埋めにするよう進言（王宣棄捐、当生理之。）。

⑦-1 大臣たちは王子を深山に捨てたり、深い水に沈めたり、穴を掘って部屋のようにし、そこに食料や5人の召使と共に置くといった進言をする。王は最後の大臣の提案を採用。

⑦-2 王子は水辺に行くと身体を洗い、衣服や飾りを取り去って、穴の場所に行く。

⑧ 王子は穴を掘る理由を尋ね、自身が慕魄王子だと召使に言う。

⑨ 召使は城に戻るよう懇願（願赦我罪、共還入宮、到父王所。）。王子、捨てられたばかりで帰還するのは良くないと拒否（今已見棄、不宜復還也。）。

⑩ なし。

⑪ 召使は城に戻って、王子が神のような存在になった（太子甚神、開口一言、真驚恐人。）と報告。

⑫ 王と王妃は車に乗って太子を迎えに行く。

⑬ 太子は身につけていた装飾品を捨て、修行者の姿をとる（転作道人、被服嚴然。）。王は戻って彼を王位につけようとする（居位理政、吾請避退。）。王子は前世で地獄に落ちて苦しんだ記憶を理由に拒否する。彼は前世で、この国の「須念」という名の王で、仁愛をもって25年間国を治めていたが、その後6万年地獄で苦しむ。周囲の小国が王が軟弱だと思い、何度となく攻めてきた。王は自身の蔵を開き、財宝を与えて戦いを回避したが、大臣たちははたまりかねて戦い、多くの人々の命を奪った。これが太子が地獄に落ちた理由である。13年間口をきかなかつたのは、過去世を思い出し罪を犯すのを恐れたためとする。王子は静黙をもって世俗を離れることを願う（冀以静黙、免瑕脱穢、出度塵勞、永辭於俗。）。王に許され、王子は国と王の位を捨てて修行し（太子於是、棄国捐王、不慕人物。一心專精、念道修徳。）、遂に仏となる。

- ⑭ 王の出家はなし。
- ⑮ 過去世と現世の結合。

(4) 『墓魄』 先のパーリ『ジャータカ』の番号を基準とし、対応する箇所を述べる。

- ① 婆羅棕国王。
- ② なし。
- ③ 王子の名前は「墓魄」。
- ④ 生有無窮之明。
- ⑤ なし。
- ⑥ 13年間、口がきけない振りをする（然太子結舌、不語十有三歳。）。彼は目が見えず、口がきけない者のようであった（目不視色、耳不聽音。状類瘖瘂、聾盲之人。）。
- ⑦ バラモンは、この子は不吉な星であり（為是熒惑耳。外為端正、内懷不祥。）、国に災いをもたらすので、生き埋めにして殺すべきと進言。
  - ⑦-1 大臣たちは王子を深山に捨てたり、深い水に沈めたり、穴を掘って生き埋めにすべきと進言。王は穴を掘らせて蔵のようにし、そこに食料や5人の召使と共に置く案を採用。
  - ⑦-2 500人の女官たちは踊りを舞い、王子の関心をかうが、彼は黙って何の反応も示さない。
- ⑧ 多くの人や動物が穴蔵の前に立って、王子が中に入るのを阻止。このとき王子は、地獄に落ちるのを恐れて口が利けない不利をしたと述べる（我適欲語、恐入地獄。我所以不語者、欲安身避害、濟神離苦。是以不語。）。人々は王子の言葉を聞いて大いに喜び、彼らの罪を詫げる。
- ⑨ なし。
- ⑩ なし。
- ⑪ 召使は王に、王子が語り、人や動物が彼の前でそれを聞いていると報告。
- ⑫ 王と王妃は車に乗って太子を迎えに行く。
- ⑬ 王は王子を位につけ、自らは退位するというが（共還入国、拳位与汝。我自避退。）、王子は過去、自分はこの国の王であったが、過失のため6万年以上地獄に堕ちたので（有欠漏故、下入地獄、六万余歳。）、罪を犯さないために13年間口がきけないふりをした、と告白。さらに世俗の過失をこれ以上犯さないため、出家を望む（冀得免瑕、除去垢穢、出於塵埃之外、不与罪会。）。王は彼の出家を許す（遂聽学道。）。王子は出家し、修行して、死後兜術天に生まれる（於是太子、棄国捐王。入山求道、思惟禪定。寿終即生、兜術天上。）。
- ⑭ 王の出家はなし。
- ⑮ 過去世と現世の結合。

(5) 『毘奈耶』は、先のパーリを中心とした4の文献とはあまり対応せず、この『カルパラター』に近い内容を示している。パーリ『ジャータカ』の番号を基準とするが、かなり異なる箇所もある。

① パーラーナシー（婆羅痲斯）の国王、梵摩達多。王妃の名前は妙梵。神に祈祷し子どもを求める。王妃の妊娠。

② 500人の大臣それぞれに子どもが生まれる。

③ 王妃が水遊びをしていたときに生まれたので、王子の名前は「水生」。

④ 王子は前世で60年太子であったとき、様々な悪業を為して地獄に堕ちたことを思い出し、もし王となれば必ず地獄に堕ちると考え、何らかの手段をもって、歩けず、口がきけない振りをする。

⑤ なし。

⑥ 王子は最初、足が不自由な振りをしたが、王はそれでも彼に王位を継がせるのに支障がないと判断したので、次に王子は口がきけない振りをした（今我復応、瘡而不語）。このため彼は「口と足が不自由な太子」と呼ばれた（因即喚為、瘡蹙太子）。

⑦ 大臣たちは医師に命じて、王子を診察させたところ、医師たちは「王子は特段の病気はなく、おそらく何らかの苦悩があって口がきけないであろう（此恐多是、情有憂懼、所以不言。）」と王に報告する。

⑦-1 なし。

⑦-2 なし。

⑦-3 王は医師の言葉を聞き、何らかの手段を用いて彼を歩かせ、言葉をしゃべらせようとする。

⑦-4 王に命じられた屠殺人（魁膾）、王子を車に乗せて屠殺場（屠膾所）へ連れていく。

⑦-5 王子は城を見て「この城は空虚で何も無いのか、人が住んでいるのか。」（此城中為、空荒無物、為有人居。）と言葉を發した。これを聞いた屠殺人は王子を城に連れ帰る。王は喜んで、誰が敵で、誰が友かと、王子に尋ねるが、王子は沈黙を守る。落胆した王は再び王子を屠殺場へ連れて行くよう命じる。

⑦-6 王子は一人の死体を4人が輿に乗せて運ぶのを見て、「この者は死んで更に死ぬのか、あるいは生きて死ぬのか。」（此為死而更死、為活為死耶。）と言葉を發した。屠殺人は前と同様、王子を城に連れ帰るが、彼は沈黙を守ったままであった。

⑦-7 王子は穀物の堆積を見て、「この穀物の堆積は、もし最初にその根本を食べなければ。」（此大穀聚、若先不食根本者。）との言葉を發した。屠殺人は前と同様、王子を城に連れ帰るが、彼は沈黙を守ったままであった。王は屠殺人に屍林に連れて行って、穴に生き埋めにするように命じる。彼は深摩舍那（墓地、= śmaśāna）に向かい、穴を掘る。

⑧ 王子は屠殺人に「どうして穴を掘っているのか。」(何意御車者 於此疾穿坑 我聞当速答 穿坑何所為)と質問する。彼は「王子が口が利けなく歩けないので、そのような役にたたない子を、王が生き埋めにしようとしている。」(大王生一子 口瘡不能行為此遣穿坑 欲埋無益子)と答える。

⑨ 王子はこの屠殺人が残虐で、人を殺すのを生業としているので、怒らせないようにしようと思い、「もし父王が私の願いを聞いてくれれば、私は話しをし、歩いて城に帰る。」と言う。

⑩ なし。

⑪ 屠殺人は王に報告する。

⑫ 王子は歩いて城に帰る。

⑬ 王子は王に、悪道の苦しみに入るのを恐れて(恐入悪道苦)、口がきけなく足が不自由な振りをしたと告白。王はその理由を尋ねると、前世で彼は王太子として60年、五欲の楽しみを受け、そのため6000年地獄に堕ち、苦しみを受けた。地獄を恐れているので、自身を林野に放せと王子は願う。王はこの提案を拒否。王子は欲望は苦しみであるから、林の中で修行(梵行)をさせて欲しいと再度懇願する。王は城には立派な褥や衣服があるのに、どうして出家して林の枯葉に寝起きするのかと問う。王子は鹿の皮の衣服をまとい、虎や豹と同居し、根や果実を食べる方が、王となって懲罰を加えるよりましであるから、山林で涅槃の路を勤修したいと懇願する。

⑬-1 王は先ず先の謎めいた言葉の意味を説明しよう王子に命じる。

王子の説明。第1の、城には多くの宝があるのに「この城は空虚で何も無いのか、人が住んでいるのか。」という言葉の秘密の意味(密意)は、「王はわけもなく私を殺させようとしています、誰一人としてそれが正しいと思う人はいなく、『王は何のためにこの太子を殺すのか』と言っています。そのため先の言葉を言いました。」(王今無事、令人殺我。竟無一人、称理而説。王今何為、殺斯太子。)

⑬-2 第2の秘密の言葉「この者は死んで更に死ぬのか、あるいは生きて死ぬのか。」に対して、「もし人が悪行をなして死んだ場合、彼は死んでさらに死ぬと言い、反対に善行をなして死んだ場合、彼は生きて死ぬ。」(若人自作悪行、而身死者、此謂死而更死。若人自為善行、而身死者、此謂活而身死。))と王子は解説する。

⑬-3 第3の秘密の言葉「この穀物の堆積は、もし最初にその根本を食べなければ。」に対して、「畑を耕す人は他人から穀物の種を借りて食べて作業すれば、後で穀物が実り多くの収穫を得ても、貸し手が来て求めると、多くを他人の貸し手に戻す(債主来索、多並還他)。先に他者から借りた物を食べなければ、より多くの収穫がある(如若先時、不食他物、便成大聚)。人の場合も同様に、十善を行うことにより、人身を得るが、悪行を犯し、善行を積まなければ、前世の善根はすぐさま消滅してしまう。善根が消滅すると善道も失う。これと違えれば失うことはありません。」と王子は解説する。

⑭ 王は王子の出家を許し、王も後で山林に随行しよう（我亦於後、随至山林。）と語る。

⑭-1 太子、500人の侍従と一緒にヴァーラーナシーを出て、仙人のもとで出家し、教えを厳修する。程なくして五通を得る。仙人の死後、太子が500人を指導するが、彼らはいつまで経っても五通を得ることが出来ない。「彼らは多くの鹿の皮や樹皮を蓄えており、さらに祭器や水器をとどめ、そこに様々な野菜、根、果実が茂り、それを食べていて、苦勞も多く、五通を証得できない。もし私が彼らを叱責すれば、彼ら500人は悟りを開くことは出来ないだろう。巧みな手段を用いた方が良かろう。」と考えて、彼らに「私はこの夏の3ヶ月間一人で静かに過ごしたい。誰一人として私に面会してはならない。ただ一人の根や果実を給仕する人（一取根果人、一供果菜人）と毎月の14日の清浄な時（月十四日長浄之晨）は例外とする。」と宣言された。

⑮ 過去世と現世との結合はムーカバング物語の後（726a）にあり。

(6) 蔵訳『薬事』 訳は八尾（2013）を参考にした。

① ヴァーラーナシーの国王、ブラフマダッタ（Tshangs byin）。王妃の名前はブラフマーヴァティー（Tshangs ldan）。シヴァ、ヴァルナ、クペーラなどの神々に祈り、息子を求める。王妃の妊娠。

② ④-1へ。

③ 王妃が池（rdzing）で水遊びをしていたときに生まれたので、王子の名前は「水の中で生まれた者」（Chu skyes）。

④ 王子は前世で60年太子であり、その後地獄に堕ちたことを思い出し、もし王となれば必ず地獄に堕ちると考え、歩けない振りをする。

④-1 500人の大臣それぞれに子どもが生まれる。

⑤ なし。

⑥ 王子は最初、足が不自由な（'phye bo）振りをしたが、王はそれでも彼に王位を継がせるのに支障がないと判断したので、次に王子は口がきけない（lkugs pa）振りをした。このため彼は「口と足が不自由な太子（lkugs 'phye）」と呼ばれた。

⑦ 大臣たちは医師に命じて、王子を診察させたところ、医師たちは「この王子は諸根が明敏で、どんな病気もみられない。ひとつ怖がらせてみてください。（skrag pa zhig mdzod cig）」と言った。

⑦-1 なし。

⑦-2 なし。

⑦-3 なし。

⑦-4 王に命じられた処刑人（gshed ma pa）は王子を車に乗せてヴァーラーナシーの中央に連れていく。

⑦-5 王子は「このヴァーラーナシーは空なのか (ci baa raa na sii 'di stong ba yin nam)、あるいは住む者があるのか ('o na te gnas pa zhig yod)。」と言葉を発した。処刑人は王子を王に差し出した。王は王子に尋ねるが、王子は沈黙を守る。落胆した王は再び処刑人に完全に王子を捨てると言った。

⑦-6 王子は死んだ人、死に連れ去られた人を見て、「これは死んだ者が死んだのか ('di ci shi ba nyid shi 'am)、あるいは生きた者が死んだのか ('o na te gson po)。」と言葉を発した。処刑人は前と同様、王子を王に差し出すが、彼は沈黙を守ったままであった。

⑦-7 王子は米の山を見て、「この大きな米の山 ('bras kyi phung po) は、もし最初に根元が食べられなければ大きくなったであろうに。」との言葉を発した。処刑人は前と同様、王子を王に差し出すが、彼は沈黙を守ったままであった。王は処刑人に屍林に連れて行って、森の中に穴 (dong) を掘って埋めてしまえと命じる。彼は墓地 (dur khrod) に向かい、穴を掘る。

⑧ 王子はどのように穴を掘っているのかと質問する。彼は、王子が口がきけなく歩けないので、穴を掘って埋めてしまえと王に命じられたと答える。

⑨ 王子はこの処刑人が残虐で、人を殺すのを生業としているので、恐れ気落ちして、「もし王が私の願いを許すならば、私は徒歩で都に入り、言葉を語ろう。」と言う。

⑩ なし。

⑪ 処刑人は王に報告する。

⑫ 王子は歩いて都に帰る。

⑬ 王子は王に、口がきけなく足が不自由ではないと告白。王はその理由を尋ねると、前世で彼は60年太子として勤め、そのため6万年地獄で苦しみを受けた。地獄にまた行くことを恐れているので、王位を望まず (rgyal srid la ni mngon mi dga'), 出家したいと願う。王はこの提案を拒否。王子は苦が発生するような幸福は幸福だと考えないとして、苦行林に行かせて欲しいと再度懇願する。王は城には立派な褥や衣服があるのに、どうして出家して荒野の草の褥や木の葉の褥に横たわるのかと問う。王子は樹皮 (shing shun) や鹿の皮 (gyang gzhis) をまとい、果実を食べ、危険な猛獣とともに居るほうがましであって、王位のために (他人を) 殺し、打ち、縛ることはふさわしくないから、苦行の森に行かせてくれと懇願する。

⑬-1 王は先ず先の謎めいた言葉の意味を説明しよう王子に命じる。

王子の第1の言葉の説明。「王様はわたしが罪なくして死ぬとおおせられましたが、誰も『この息子をどうして殺すのか』と法の言葉 (chos kyi tshigs) を言わない、というそのことを考えて、私は言ったのです。」

⑬-2 第2の言葉の説明。「悪くなされた業をなしてから死ぬ者は、死んだ者として死んだのであり、良くなされた業をなしてから死ぬ者は、生きた者として死ぬのである、というそのことを考えてわたしは言ったのです。」

⑬-3 第3の言葉の説明。「これらの農夫たちは米を借り、食べてから仕事をし、作物が実って大きな米の山を築いてから貸主に払う。そうであれば、それらのその根元は前に食べたものにほかなりません。そのように十の善なる業の道によって人間としての生を獲得しても、それを獲得してから善なる業の道が増大しないならば、かれのその前の善は消滅するであろう、その善の根が断絶するならば、幸福な境涯から堕ちて悪趣に住むことになるであろう、というそのことを考えて、わたしは言ったのです。」

⑭ 王は王子の出家を許し、王も王子の弟子になると約束する。

⑭-1 太子、500人の眷属と一緒にヴァーラーナシーからあまり遠くない隠棲所にいるバラモン仙人のもとで出家し、教えを厳修する。王子は激しい努力、専心、精励によって五神通をまのあたりにする。仙人の死後、王子は500人のバラモン青年に教えを授け、かれらは努力、専心、精励によって五神通をまのあたりにした。

⑮ 過去世と現世の結合。

(7) 蔵訳『律分別』は、(5)『毘奈耶』と大筋で一致し、(6)チベット訳『薬事』と『カルパラター』に近い内容を示す。これもパーリ『ジャータカ』の番号を基準とするが、かなり異なる箇所もある。

① ヴァーラーナシーの国王、ブラフマダッタ (Tshangs byin)。王妃の名前はブラフマーヴァティー (Tshangs ldan)。シヴァ、ヴァルナ、クベーラなどの神々に祈り、息子を求める。王妃が妊娠する。

② ④-1へ。

③ 王妃が池 (rdzing) で水遊びをしていたときに生まれたので、王子の名前は「水の中で生まれた者」(Chu skyes)。

④ 王子は前世で60年太子であったとき、様々な悪業を為して地獄に堕ちたことを思い出し、もし王となれば必ず地獄に堕ちると考え、足が不自由な ('phye bo) 振りをする。

④-1 500人の大臣それぞれに子どもが生まれる。

⑤ なし。

⑥ 王子は最初、足が不自由な ('phye bo) 振りをしたが、王はそれでも彼に王位を継がせるのに支障がないと判断したので、次に王子は口がきけない (lkugs pa) 振りをした。このため彼は「口と足が不自由な太子 (lkugs 'phye)」と呼ばれた。

⑦ 大臣たちは医師に命じて、王子を診察させたところ、医師たちは「王子は諸根明瞭である (dbang po gsal bar gda') が、何らかの理由があるため、恐れを与えることが良いでしょう。(bsdigs par bgyi ba'i rigs so)」と王に報告する。

⑦-1 なし。

⑦-2 なし。

⑦-3 王は医師の言葉を聞き、処刑人 (gshed ma) を呼び、王子を人々の面前で捨てる

ことを宣言する。

⑦-4 王に命じられた処刑人、王子を馬車 (shing rta) に乗せてヴァーラーナシーの外に連れていく。

⑦-5 王子はヴァーラーナシーの繁栄 ('byor pa dang rgyas pa) を見て「このヴァーラーナシーは空なのか (ci baa raa na sii 'di stong ba yin nam)、あるいは住む者があるのか ('o na te gnas pa yin)。」と言葉を発した。これを聞いた処刑人は王子を王のところに連れ帰る。王は誰を殺すのか、あるいは何かを与えるのかと王子に尋ねるが、王子は沈黙を守る。王は再び王子を連行するよう命じる。

⑦-6 王子は一人の死体を4人が輿に乗せて運ぶのを見て、「この死体はまさに死んだ死体なのか (ci ro 'di shi ba nyid kyi ro yin nam)、あるいは生きた者の死体なのか ('o na te gson po'i ro yin)。」と言葉を発した。処刑人は前と同様、王子を連れ帰るが、彼は沈黙を守ったままであった。

⑦-7 王子は穀物の堆積 ('bru'i phung po chen po) を見て、「この穀物の堆積は、もし最初にその根本を食べなければ大きくなったであろうに (gal te 'bru'i phung 'di dang po nyid nas drung ma zos na chen por 'gyur ro)。」との言葉を発した。処刑人は前と同様、王子を連れ帰るが、彼は沈黙を守ったままであった。王は処刑人に穴に (sa thams su) 埋めるように命じる。処刑人は穴を掘る (dong brko bar brtsams)。

⑧ 王子は馱者に「どうして穴を掘っているのか。」と問う。彼は「王子が口がきけなく歩けないので、そのような役にたたない子を、王が生き埋めにしようとしている。」と答える。

⑨ 王子はこの処刑人が残虐で、人を殺すのを生業としているので、恐れて、「もし父王が私の願いを聞いてくれれば、私は私の足で都に行き、言葉を話そう。」と言う。

⑩ なし。

⑪ 処刑人は王に報告する。

⑫ 王子は歩いて都に帰る。

⑬ 王子は王に、口がきけなく足が不自由な振りをしたと告白。王はその理由を尋ねると、前世で60年の間、王太子であったが、そのため6万年地獄に墮ち、苦しみを受けた。地獄を恐れているので、王子は出家を願う。王はこの提案を拒否。王子は欲望を望まないから、梵行 (tshangs spyod) をさせて欲しいと再度懇願する。王は城には立派な褥や衣服があるのに、どうして出家して森の枯葉に寝起きするのかと問う。王子は森で樹皮や根をまとい (nags na shing shun rtsa gyon)、野生動物と同居し、根や果実を食べる方が、王となって懲罰を加えるよりましであるから、出家を許してほしいと懇願する。

⑬-1 王は先ず先の謎めいた言葉の意味を説明するよう王子に命じる。

王子の説明。第1の、「このヴァーラーナシーは空なのか、あるいは住む者があるのか。」という言葉の意味は、「王はわけもなく私を殺させようとしています、誰も『この若

者をどうして殺すのか』と法の言葉（chos dang ldan pa'i tshigs）を言わない、ということを考えて、私は言ったのです。」

⑬-2 第2の言葉の説明。「過ちを犯す業をなした死体は、死んだ者としての死体であり、善行の業をなした死体は、生きた者としての死体である、ということを考えてわたしは言ったのです。」

⑬-3 第3の言葉の説明。「これらの農夫たちは穀物を借り、食べてから仕事をし、作物が実って大きな穀物の山を築いてから貸主に払う。そうであれば、それらのその根元は前に借りるために頼んだものにほかならない。そのように十の善なる業の道によって人間としての生を獲得しても、それを獲得してから善なる業の道が増大しないならば、かれのその前の善は消滅するであろう、その善の根が断絶するならば、幸福な境涯から墮ちて悪趣に住むことになるであろう、ということを考えて、わたしは言ったのです。」

⑭ 王は王子の出家を許し、王も王子の弟子になると約束する。

⑭-1 太子、500人の大臣の息子たちと一緒にヴァーラーナシーからさほど離れていない、仙人のもとで出家する。太子は精励することで五神通（mngon par shes pa lnga）を得る。仙人の死後、太子が500人を指導するが、彼らはいつまで経っても五神通を得ることが出来ない。「彼らは多くの鹿の皮（gyang gzhis）や樹皮、水器等を持ち、余剰を蓄え、木の葉や実などを得ようと必死であるために五神通を証得できない。もし私が彼らを叱責すれば、彼ら500人は悟りを開くことは出来ないだろう。」と考えて、彼らに「私はこの夏の3ヶ月間一人で静かに過ごしたい。誰一人として私に面会してはならない。ただ一人の根や果実を給仕する人と毎月の14日の清浄な時は例外とする。」と宣言する。

⑭-2 一面に住する太子、鹿を迎える。太子は鹿と同様に無所有であると語る。それを聞いたバラモンの弟子たち（大臣の息子たち）は樹皮や水瓶などの余剰なものを川の水に捨てる。このようにして彼らも五神通を得る。

⑮ 過去世と現世との結合。

#### 4. 各文献の関係

『カルパラター』に一番近いのは（5）の『毘奈耶』と（7）の蔵訳『律分別』である。「ムーカパング」物語の前後に釈迦族の出家者が余分な出家用資具を貯蔵していたこと、それが悟りの邪魔になることを気づかせるため、仏陀が3ヶ月間独住し、だれも面会させなかったこと、さらに阿蘭若での修行者は例外とすることなど、ほぼ同一の内容を提供している。ただ『毘奈耶』と『律分別』に説く王子生き埋めの記述は『カルパラター』にはない。この『毘奈耶』と『律分別』に近いのが蔵訳『薬事』であるが、先の捨墮法に関する記述はなく、さらに500人の釈迦族の修行者がすぐさま悟りを得たとしており、悟りの邪魔と知って資具を捨てて、最終的に悟りに達した『カルパラター』

や『毘奈耶』、『律分別』の内容と異なる。

いっぽう、これらの内容と大きく異なるのは、パーリ『ジャータカ』、『六度』、さらに『慕魄』と『墓魄』である。これらは3つの謎解きの言葉を説かず、ただ王子を生き埋めにしようとした記述のみを伝える。それ故、この物語は『毘奈耶』のグループとパーリ『ジャータカ』のグループとに大別され、『カルパラター』は『毘奈耶』のグループの内容を底本としながら、僅かの改変を加えたものと結論づけることが出来る。

### 参考文献

- 佐藤密雄．1963．『原始仏教教団の研究』山喜房佛書林．  
杉本卓洲．1993．『菩薩、ジャータカからの探求』サーラ叢書29、平楽寺書店．  
干瀧龍祥．1978．『改定増補版 本生経類の思想史的研究・附編：本生経類総合全表』山喜房佛書林．  
平川 彰．1993．『平川彰著作集 第15巻 二百五十戒の研究II』春秋社．  
八尾 史．2013．『根本説一切有部律業事』連合出版．

## 和 訳

### 出家用の蓄えは罪か

無所有の (ākiṃcanya-: ci yang med pa'i)<sup>6</sup> 幸せのために、無欲性によって (niḥspṛhatayā: chags pa med pa) 離欲の幸運を (vairāgya-lakṣmī-: chags bral dpa 'byor) 楽しむ者たちは、肉体を同伴していても、全てを捨てて寂靜のために森に赴く。

その場合に禁戒を守るふりをして (vrata-ḍambare: tshul 'chos brtul zhugs dag la)、禪定用の帯<sup>7</sup>を締めるための (=出家用の) (parikara^ārambhāya: yo byad rtsom pa) 蓄えがあるとすれば、蔵にある私有物や資具によって (koṣa-paricchada^upakaraṇair: mdzod kyi yo byad nyer mkho de dag rnams kyi) 家でどんな罪がなされるというのか。(1)<sup>8</sup>

### 蓄えのある釈迦族の王子

かつて勝者が祇多林の精舎を楽しまれていた時、  
面前で釈迦族の王子たちが出家を好み、(2)<sup>9</sup>

<sup>6</sup> ( ) 内のコロンの後の語は対応する蔵語訳の語で必要と思われる箇所原文のままの形で加えた。

<sup>7</sup> 蔵訳では yo byad 「資具」

<sup>8</sup> 韻律は Śārdūlavikrīḍitam。

<sup>9</sup> 第2偈から第15偈までの韻律は Anuṣṭubh。

美しい僧衣や (citra-cīvara-: bkra ba'i gos) 立派な鉢や (sat-pātra-: dam pa'i snod) 禪定紐 (yogapaṭṭa-: bus 'khyud) 等の蓄えが<sup>10</sup>

より一層多いのを見て、世尊は思案された。(3)

「ああ、悲しいかな。まだこれらの者たちには束縛の原因が消滅していない。

高慢さを抱く者が、身体に禪定帯<sup>11</sup>を巻くことを (parikara-grahaḥ: yo byad 'dzin) 好むとは<sup>12</sup>。(4)

身体に身体の資具があり (kāya-pariṣkāras: lus kyi chas rnam) <sup>13</sup>、その(資具には)紐状の<sup>14</sup>資材 (upakaraṇa'āvalī: nye bar mkho ba'i phreng) がある。

そのうちの禪定用の帯を締めるとは (parikāra'ādānam: yo byad 'dzin pa)。ああ、単なる束縛の鉄の鎖ではないか。」(5)

### 3ヶ月間、比丘たちは世尊に謁見なしという戒律の制定

世尊はこのように考えて一面に住されると<sup>15</sup>、

慈悲心から、出仕した者たちの (upasannānām: nyer 'dzin rnam) 善行に向けての (kuśalāya: dge ba'i slad du) 用意をなされた。<sup>16</sup> (6)

3ヶ月は誰も(世尊に)奉仕してはならない<sup>17</sup>という、

不謁見の (adarśanāya) 通知を (saṃvidam) 比丘たちに出された。<sup>18</sup> (7)

### ウパセーナ比丘、釈尊に直ちに謁見

その(世尊に謁見する)禁止が (niyame: nges pa) 始まった時<sup>19</sup>、阿蘭若(修行の)誓いを守る (āraṇyaka-vrataḥ: dgon pa'i brtol zhugs can) 比丘で、

粗末な衣をまとった (tanu-cīvaraḥ: chos gos dman ldan) ウパセーナ (Upasena-: Nye ba'i sde) という者が<sup>20</sup>、用事の為にやって来た。(8)

<sup>10</sup> 『毘奈耶』(722b)に「長衣長鉢、絡囊腰条、並多貯蓄。」とある。

<sup>11</sup> 注7に同じ。

<sup>12</sup> 『毘奈耶』(722b)に「此諸釈子、本求解脱、而為出家。於出離因、悉皆棄捨。不修善品、耽溺財利。」とある。

<sup>13</sup> 雲井昭善『パーリ語辞典』に従えば、8資具 (parikkhāra) として、ticīvaraṃ, patta, vāsi, sūci, bandhanaṃ pariśāvana (3衣、鉢、剃刀、針、腰帯と水濾) がある。

<sup>14</sup> P: phreng (=āvalī), D: bsred

<sup>15</sup> de Jong に従って、naikānta を ekānta と訂正した。

<sup>16</sup> 『毘奈耶』(722b)に「応示諸仏、正覚調伏、善巧化度之儀。」とある。

<sup>17</sup> de Jong に従って、māsātayaṃ nopasthānaṃ と訂正した。

<sup>18</sup> 『毘奈耶』(722b)に「我欲於此夏安居、三月之内、宴默而住。勿令苾芻、輒來見我。除一苾芻、為我請食者。除長淨日。」とある。

<sup>19</sup> niyama 「禁止」を藏訳では nges pa と訳出している。この後の第11、69、72偈も同様。

<sup>20</sup> 『毘奈耶』(722c)に「小軍」とある。

禁止されていたものの (pravāriṭaḥ: rab zlog)<sup>21</sup>、彼は幸運にも善逝との謁見を (sugata-darśanam) 得て、

あつという間に為すべきことを為し終えた (阿羅漢の状態) になると (kṛtakṛtyaḥ: bya ba byas)、彼 (の世尊) にお辞儀をして出発した。(9)

比丘たちは歩みを進めている彼に近寄り、(彼を) 囲んで尋ねた。

「ああ、聖者よ、どのようにして世尊によってあなたとの面会が叶えられたのか。(10)

3ヶ月もの間、命令によって (śāsanena) 彼 (の仏との) 謁見は禁止されているのに (niyamah)、

どうして、その (禁止は) 汝によって破られたのか。(汝は) サンガの誤った方向に進んでいる<sup>22</sup>。」<sup>23</sup> (11)

### 阿蘭若比丘は直ちに釈尊に謁見できる

彼らのその言葉を聞いて、ウパセーナは微笑みながら

彼らに言った。「私は規則を破ることは (samaya-viplavaḥ: nges pa [gang yang] nyams [ma byas]) 何一つしていません。(12)

私は世尊自ら拝謁のときに言われました。

『阿蘭若にいる (āraṇyakasya) 比丘が私に面会することは禁止 (niśedho: bkag pa) されていない。』と<sup>24</sup>。(13)

私有物や資具を (paricchada-upakaraṇa: yo byad nyer mkho) 捨てて束縛から解放された者で、

樹下にて (vṛkṣamūlikāḥ : shing drung)、糞掃衣を着る者は (pāṃśukūlikāḥ: phyag dar khrod pa dag) 面会を妨げられません。<sup>25</sup> (14)

『今朝はこれが最高だ。<sup>26</sup>』と言って、多くの鉢や法衣の集まりを (pātra-cīvara-vargeṣu: lhung bzed chos gos tshogs rnams la) 喜ぶ者たち、

<sup>21</sup> 『毘奈耶』(723a) に、仏陀と小軍との会話の中に、小軍が僧伽の規則を破ったのではないか (然汝不応、違僧制令。) と仏陀が問うたとある。

<sup>22</sup> 『毘奈耶』(723b) に、「どうして汝は破僧伽の制を見ないというのか」(汝豈不見、破僧制耶。) とある。

<sup>23</sup> 『毘奈耶』(722c) によると、比丘たちは小軍が世尊の場所にやってきたのを見て、「3ヶ月間仏陀に謁見してはいけぬ。これを破れば波逸底迦罪を犯し、懺悔すべきだ。」という規則を作り (衆共立制)、仏陀に面会しようとした小軍にこの罪を適用しようとした。

<sup>24</sup> 『毘奈耶』(723a) に「仏告小軍、然阿蘭若苾芻、与其饒益、免依僧制。若阿蘭若人、欲見我者、無問時節、随意来見。」とある。

<sup>25</sup> 『毘奈耶』(723a) は、住阿蘭若人、糞掃衣人、樹下居人などの13種の杜多 (頭陀) 功德相應者を列挙する。

<sup>26</sup> param を藏訳で gzhan 「他」とする。

彼らとのここでの面会はない。(15)

寂静の戒律のための資具に (-upakarane) 高慢さを抱くことを結びつけている者たち、  
彼らは氷のように冷たく流れる水によっても喉の渇きにとても苦しみ、  
妨げることはない大きな財宝の家においても貧困から十分に苦しみ<sup>27</sup>、  
栴檀の木から彼らを悩ますような火が起こる。」(16)<sup>28</sup>

### 釈迦族の比丘、不要な持ち物を捨て、預流果に到達

このようにウパセーナが言うのを聞くと、彼ら釈迦族の比丘たちは  
当惑してやる気をなくし、たちまち考えこんだ。(17)<sup>29</sup>

「我々だけが多くの美しい法衣を上衣として (-prāvāra)<sup>30</sup> 着ていると、  
他の人ではなく我々に対してだけ、世尊によって指摘された。(18)

我々が欲望を捨てれば大師から好まれ、大欲があれば嫌われる。

それゆえ欲望を捨てれば、我々は彼の方によって認められよう。」<sup>31</sup> (19)

このように考えて、彼らは全員、(必要な法衣のみを)

まとい<sup>32</sup>、余分な端嚴な法衣の集まりを捨てて世尊の近くに行った。(20)

欲望が静まると、世尊は彼らに恩恵を (anugraham: rjes su bzung ba) 与えられた。

金剛のごとき智によって (jñānavajreṇa: ye shes rdo rjes)、岩のごとき有身見を  
(satkāyadrṣṭi-sāilaṃ: 'jig tshogs lta ba'i ri bo) 打ち砕かれた。(21)

預流という果報への到達を経験した (srotahprāptiphala-sprṣām: rgyun zhugs 'bras bu la reg  
pa) 釈迦族の王子たちの<sup>33</sup>

<sup>27</sup> 原文は te nityaṃ ca nidhānadhāmnī vivṛte 'py anyād alaṃ durgatāḥ であるが意味が取りにくい。ここでは de Jong に従って、te nirvighnanidhānadhāmnī vivṛte dainyād alaṃ durgatāḥ と訂正して訳した。蔵訳では、myang 'das gegs med gter gyi gnas la 「涅槃の障碍がない宝のような場所において」としている。de Jong が指摘するように、myang 'das としたのは nirvṛte の誤訳と見られる。

<sup>28</sup> 韻律は Śārdūlavikrīḍitam。

<sup>29</sup> 第17偈から第51偈までの韻律は Anuṣṭubh。

<sup>30</sup> 対応するチベット語句がない。

<sup>31</sup> 『毘奈耶』(723b) に「我等在此、而不能得、親奉承事。此意即是、由見多貪、擯斥於我。我等宜於、長衣鉢物、觀之如病、如癰如箭、當棄除之。」とある。

<sup>32</sup> 蔵訳は以下。「彼ら全員は、本当に着用するものを除いて、残りの美しい衣服の集まりを捨てて」  
de dag thams cad kyi/ / rab tu gyon pa las lhaḡ pa'i /mdzes ba'i gos kyi tshogs btang nas/

<sup>33</sup> 『毘奈耶』(723c) にムーカバング物語の前触れとして、どうして小軍比丘によって、500人の釈迦族の比丘たちは涅槃の岸に到ったのか「稀有世尊、有何因縁、由小軍苾芻故、遂令五百、積種苾芻、遠離多貪、求少欲行、得殊勝果、度生死海、昇涅槃岸、究竟令住、安穩之処。」という比丘たちの質問があり、この物語の最後『毘奈耶』(726b) に「往時能施、即小軍是。我於往時、由能施故、令五百人、捨離多貪。修少欲行、獲得五通。今時由小軍故、令五百積種苾芻、捨棄貪求、遵知足行、具足六通、成阿羅漢、究竟安住、寂滅城中。」とある。

前生の行いを (pūrva-vṛttāntaḥ: sngon byung) 比丘たちによって尋ねられると、如来は語られた。(22)

### ブラフマダッタ王と妻ブラフマーヴァティー

むかし、ヴァーラーナシーに (Vārāṇasyām) ブラフマダッタという (Brahmadatto: Tshangs pas byin) <sup>34</sup>大王がいた。

布施に濡れた (-ārdra-: brian) 手をしており、世界の四方を守る象のような (digdvipa-: gnyis 'thung bzhin) 腕は大地を支えていた。(23)

彼にはブラフマーヴァティーという (Brahmāvati: Tshangs ldan ma) <sup>35</sup>妻がいた。(彼女は) 真珠の首飾りのように美德を具えていた。

偉大な人の名声がよく知られるように (王の妻も) 有名であった。(24)

清浄な心の持ち主である彼女は、夫の映像のような、

神にも等しい特徴を持つ子供を、適時に <sup>36</sup>水遊びにやって来て産んだ。(25)

### 息子ウダカと500人の大臣の子どもたちの誕生

その男の子は水の中で生まれたので、ウダカと (Udaka-: Chu skyes) <sup>37</sup>呼ばれた。

皇太子として跡を継いでほしいとの (yauvarājya-) 願いにより、父と同じほどに (tulyaṃ) 成長した。(26)

彼の誕生と同じ日に、500人の大臣たちは (それぞれ)

よく似た500人の息子たちを得た。<sup>38</sup> (27)

その子供は前世を思い出せ (jāti-smaraḥ: rang gi skye dran) たので、次第に自らの前生の行動を (prāg-vṛttaḥ: sngon byung) 思い出して、

自身のためになる善行を (sukṛtaṃ) (実践する) 時が来た (prāpta-kālaḥ: dus la bab par) と考えた。(28)

「私は前生で、60年間皇太子職に (yauvarājyam) 就いていたが、

長い間地獄という難所で (naraka-saṃkaṭaḥ: mi bzad dmyal bar) ひどい苦しみに (kṛcchra-: sdug bsngal) 悩まされた。(29)

この生でもまた再び皇太子の地位を手に入れているが、

<sup>34</sup> 『毘奈耶』(723c) は「梵摩達多」。

<sup>35</sup> 『毘奈耶』(724a) は「妙梵」。

<sup>36</sup> 蔵訳に対応する語はなく、「水遊びにやって来た時に」と於格とする。

<sup>37</sup> 『毘奈耶』(724a) には、池で王妃が舟遊びをしていたとき生まれたので「水生」と名づけられた、とある。

<sup>38</sup> 『毘奈耶』(724b) にも「水生太子、当誕之日、五百大臣、悉皆生子。」とある。

望まれても私は決して罪を (pātakam: sdiḡ pa) 犯さないようにしよう。」<sup>39</sup> (30)

### 王子、足が不自由で、口もきけないので「ムーカバング」と呼ばれる

このように長い間考えて、彼は王権の享受から (rājabhoga-: rgyal srid longs spyod) 目を背けて、

父に嫌悪を生じさせるような、足が不自由で (paṅgu-: 'phye bo) 口のきけないふりを (mūkatām: lkugs pa) した。(31)

全ての瑞相を (-lakṣaṇa-: mtshan nyid) 持ち合わせていたが、王の行動の器ではなかった<sup>40</sup>。

彼はムーカバング (Mūkapaṅgu: lkugs pa'i phye bo 口のきけない、足の不自由な者)<sup>41</sup> という名前で呼ばれ、縁者たちの苦しみを増大させた。(32)

(同時に生まれた) 大臣の息子たちは剣術・学問・腕力の向上を得たが、

(一方の) 王子は成長しても立ち上がることも、しゃべることもできなかった。(33)

### 医師たちの忠告に従い、王は息子を不当にも処刑場に送る

その後、王によって彼の障碍の治癒について (-doṣa-bheṣajam: lus skyon gyi sman) 尋ねられた医師たちは (vidyās: sman pas)、

(次のように) 言った。「王様<sup>42</sup>、王子に欠陥は (vaikalyam: mtshang) 認められません。(34)

もし安楽を貪る (sukha-sevinaḥ) 彼の習慣から障碍が生じたのであれば、

そうであればこの方は恐れへの苦痛から (bhaya-samvegād: 'jig pa'i shugs las)、立って話すようになるでしょう。」<sup>43</sup> (35)

このように医師が言ったのを聞いて、王は「了解した。」と言った。

息子を恐れさせるために、不当にも (彼を) 処刑場へ (vadhya-vasudhām: gsod pa'i sa ru)<sup>44</sup> 送った。(36)

<sup>39</sup> 『毘奈耶』(724b)にも、「過去世で60年間王子として、悪業をかさね、そのため地獄に堕ちた。今また王家に生まれたが、王となれば再び地獄に堕ちるだろう。何らかの方便をもって足の不自由なふりをしよう。」(我昔於人趣、六十年中、曾為太子。由作種種、諸惡業故、墮地獄中。今處人道、生在王家。此非善處。若得為王、還墮地獄。遂便詭設方便、身不起行、現攣蹙相。)とある。

<sup>40</sup> rajavṛtter abhājanam となっているが、rajavṛtter abhājanaḥ と訂正した方が適切かもしれない。デルゲ版は rājavṛtter abhājanam とする。

<sup>41</sup> 『毘奈耶』(724b)に「因即喚為、瘡蹙太子。」とある。

<sup>42</sup> 藏訳に対応する語はない。

<sup>43</sup> 『毘奈耶』(724b)に、医者とは、王子はどこも悪いところはないが、心に恐怖を抱いているから話さないであろう「我等詳觀太子。諸根明利、更無病狀。此恐多是、情有憂懼、所以不言。」という医者の見立てを紹介する。

<sup>44</sup> 『毘奈耶』(724c)には「屠膾所」。

### 王子最初の謎の言葉を発す

人々に罵られながら、彼は馬車にいる者<sup>45</sup>に言った。

「このヴァーラーナシーの地には誰か人が住んでいるのか、いないのか。」<sup>46</sup>と。(37)

このような彼の言葉を聞いて、彼らは彼を王の御前に連れて行った。

そこでは父によって請われても(彼は)再び口がきけない者になってしまった。(38)

### 王子2回目の謎の言葉を発す

再び処刑場に連れて行かれた彼は死体を見て言った。

「そもそもこの死体は一体全体 (sarvātmanā: bdag nyid kun gyi) 生きているのか死んでいるのか。」<sup>47</sup>と。(39)

これを聞いて、彼らは再び彼を父の側に据え置いたが、彼は再び沈黙を装った。

### 王子3回目の謎の言葉を発す

殺害の恐れから、再び連れて行かれると道中で彼らに話した。(40)

「この穀物の集積は食べても、(依然として) 食べられるほどある。」<sup>48</sup>と。

このような言葉を発したが、父の前では再び何も言わなかった。(41)

### 王子の願い

それから、王によって彼の放棄を (-pratikṣepe: rab smad) 告げるが命令が<sup>49</sup>下されると、彼は「願いを叶えられると (varadānena: mchog ster na)、私は話しもしますし、両足で歩きもします。」<sup>50</sup>と言った。(42)

さて喜んだ王によって彼の願いを叶えることが約束されると、彼は両足で自ら近づいて、はっきりと父(王)に言った。(43)

「私は足が不自由で (paṅgur) はなし、口のきけない者でも (mūko) ありません。さらに私は愚鈍でも (jaḍāsayah: blun po) ありません。

そうではなくて、他生での煩惱を思い出して、大変困惑して (vaihvālyam: rnam par 'khrugs la) いるのです。<sup>51</sup> (44)

<sup>45</sup> 『毘奈耶』(724c)には、王の命令によって「魁膾者」は王子を宝車に乗せて、屠膾所に向かったとあるから、ここではこの処刑人を指すと思われる。八尾 2013: 416を参照。

<sup>46</sup> 『毘奈耶』(724c)に「今此城中、為空荒無物、為有人居。」とある。

<sup>47</sup> 『毘奈耶』(724c)に「此為死而更死、為活為死耶。」とある。

<sup>48</sup> 『毘奈耶』(724c)に「此大穀聚、若先不食根本者。」とある。

<sup>49</sup> 『毘奈耶』(724c)には、屍林に連れて行って、穴に埋めてしまえと、王が処刑人に命じた「汝可疾去、往彼屍林。宜以太子、埋於坑穿。」とある。

<sup>50</sup> 『毘奈耶』(724c)に「若其父王、隨我願者、我当口語、足歩還城。」とある。

<sup>51</sup> 『毘奈耶』(725a)に「大王今当知 我非瘡癩者 亦非愚騃類 畏苦故須然 我有足能行 有口

私は前生で、60年の間、皇太子位の (yauvarājya: rgyal tshab) 幸せを享受してから、6万年の間、地獄の中に住みました。(45)  
そのために王を恐れて、私はこのような口がきけず、足の不自由なふりをしたのです。出家して私は梵行を行います。これが私の望み (vara: mchog) です。」<sup>52</sup> (46)

### 王の嘆き

このように彼が言ったことを聞いて王は彼に言った。  
「(汝が) 口がきけない者でないと (amūka: ma lkugs) 聞いて (私は) 気を取り直したが、世俗に関心がなくなったと聞いて (私は) 苦しんでいる。(47)  
息子よ、このダルマの根本である王国を捨て去るべきではない。  
祭祀・布施・人民の保護により、王の威光は功德で一杯になる。(48)  
息子よ、(お前は) 一人息子だ。(それなのに) 出離への志向から (parityāga-rasād: chags pa yongs su btang ba las)、  
お前は、悲しみの床に寝そべる私を眠りの欠いた状態にした。(49)  
満月のように美しく、きれいな真珠のように輝く  
繁栄を (sampadam: phun sum tshogs pa) 捨てて、お前はなぜ出家を (pravrajyā: rab 'byung) 好むのか。(50)  
どうして偉大な王家の幸福にふさわしい寝床を捨てて、  
森に住むことを好んで、埃まみれの場所にいるのか。(51)  
美しい女性の戯れ、鏡や宝石を備えた宮殿のあるこの王城を  
捨てて、襲いかかる虎で恐ろしく、  
年老いた大蛇の息で葉が落ち、  
陰が薄くなり<sup>53</sup>、つる草がほとんどないような、これらの森の地がどうしてお前の全くの喜びとなるというのか。」(52)<sup>54</sup>

分明語 恐入悪道苦 故作如是事」。

<sup>52</sup> 『毘奈耶』(725a)に「願王当善聽 我為説因縁 我於前世時 會經六十歲 得為王太子 具受五欲樂 由斯六千歲 墮在泥黎中 備受諸苦惱 不可以言説 業盡方得出 重獲於人身 我憶如是事 恐墮地獄中 定不願為王 放我之林野」。

<sup>53</sup> de Jong は読みの提示をしていない。pāda c の箇所蔵訳は、brtan pa'i sprul ni rgan po'i dbugs kyi bsregs pa dang ldan grib ma dman gyur ba とする。デルゲ版のチベット語音写では、vipluṣṭa (=bsregs pa) śliṣṭa (=dang ldan) kliṣṭa (=dman gyur) cchāya (=grib ma) と一致するが、サンスクリット語のテキストは vipluṣṭa-patrāḥ kliṣṭa-cchāyāḥ となっている。

<sup>54</sup> 韻律は Mandākrāntā。『毘奈耶』(725b)に「若出家者、住止山林、寢臥枯葉、狐狼虎豹、吼叫相驚。皮草為衣、根果充食。水皆熱濁、欲飲無由。」とある。

### 王子、出家の許し請う

このような父の言葉を聞くと、王子は彼（の王）に言った。  
（彼は）歯と美しい唇の輝きある離欲を（*vairāgyam: chags bral*）（父に）譲渡しているか  
のようであった。（53）<sup>55</sup>

「涼やかで、清らかな水があり、満足という月のように涼しげな、  
離欲に相応しい、森の地が誰にとって好ましくないことがありますか。（54）  
すぐさまの快楽に心を傾けた不逞の輩を伴う、他人の妻のように、  
地獄（の恐怖）の原因となるような、災難を伴う女性というものは（*priyāḥ: dga' ma*）、  
私には好ましく（*priyāḥ: mi dga'*）<sup>56</sup>ありません。（55）  
瞑想、マントラ、遍智（*parijñānam: yongs shes*）、感官の制御、  
これらは、王たちの害心や怠慢と（*hiṃsā-aprayatnena*）結びつくと、地獄をもたらします。  
（56）

花で満ちた森の地は輪廻を（*saṃsāraṃ*）笑い、  
賢者たちに寂靜からなる（*śamamayīm: zhi ba'i*）本性上の喜びをもたらします。  
王たちの栄光は団扇の風や息で（*ucchvāsa: shugs ring*）満ちていても<sup>57</sup>、心配で（*cintā:-  
bsam pa*）とても疲弊しています。

確かにこれ（の栄光）は幸福の友ではありません。（57）<sup>58</sup>  
私を許してください、父よ。私は苦行林に（*tapovanam: dka' thub nags su*）行きます。  
無常は（*anityatām: mi rtag pa*）すべての存在の頭についているとお知り下さい。」（58）<sup>59</sup>

### 王子の沈黙に関する父の問い

このような息子の言葉を聞いて、（父王は）それはその通りであると考えながらも、  
賢明な王は大きな驚きを持って彼に言った。（59）

「息子よ、もし人気がない、清浄な森を汝が望むのなら、  
まず私の疑問を破って、それから正しいことを（*yuktiṃ: rigs par*）しなさい<sup>60</sup>。（60）  
汝は処刑場に行くさい、遠まわしの（*tiryag: 'khyog po*）言葉を発した。  
本当のところのその意図を（*abhiprāyaṃ: dgongs pa*）十分に説明しなさい。」（61）

<sup>55</sup> 第52偈から第56偈までの韻律は *Anuṣṭubh*。

<sup>56</sup> 原語 *priyāḥ* を「女性」と「好ましい」の2重の意味で使用している。

<sup>57</sup> 蔵訳では、*rlung yab rlung gi shugs rings mang* / 「団扇（での）風の力が強く大きい」。サンスクリット語の *ucchvāsa* から、蔵語の *shugs ring* 「ため息」が想定されるが、デルゲ版および北京版の蔵訳で *shugs rings mang* と訳出している。

<sup>58</sup> 韻律は *Śikhariṇī*。

<sup>59</sup> 第58偈から第75偈までの韻律は *Anuṣṭubh*。

<sup>60</sup> P: *phyi nas ni gas bar khyod 'gyur ro /*, D: *phyi nas rigs par khyod 'gyur ro /*.

### 王子による第1の謎解き

このように王によって尋ねられると、彼はそのことに関して問われたことに (tanmaya^uditam) <sup>61</sup>答えた。

「あなた様に私の殺害をやめさせるような者は、ここには誰もおりません。」<sup>62</sup> (62)

### 第2、第3の謎解き

善行者の死体は生きており、悪人は死んでなくとも死んでいます。<sup>63</sup>

前世の功德は根元から享受されます。それはあたかも富者によって穀物の集積が(享受される)ようなものです。<sup>64</sup> (63)

以上の思いから、父よ<sup>65</sup>、私は3つの(謎の)言葉<sup>66</sup>を話しました。<sup>67</sup> (64)

### 王子の出家

これを聞いて、王は彼を愛情込めて (sādaraḥ) 抱きしめると、

「息子よ、功德のために適切なことをしなさい。」と言った。(65)

それから、目に涙をためた父に<sup>68</sup>暇乞いの許しを得ると (anujñātaḥ)、彼(の王子)は、森へ、

500人の大臣の息子たちと一緒に向かった。(66)

<sup>61</sup> 第37偈の「このヴァーラーナシーの地には誰か人が住んでいるのか、いないのか」の謎解き。

<sup>62</sup> 『毘奈耶』(725b)に「王は理由もなく私を殺させようとしてされている。誰一人として道理があるという者はいません。『王は今どうしてこの太子を殺すのか。』と言っています。」(王今無事、令人殺我。竟無一人、称理而説。王今何為、殺斯太子。)とある。

<sup>63</sup> 『毘奈耶』(725b)に第2の謎解きとして「もし人が悪行をなして、身体が減れば、これは『死んでさらに死ぬ』といい、善行をなして身体が減れば、『生きて身体は死ぬ』と言います。」(若人自作悪行、而身死者、此謂死而更死。若人自為善行、而見死者、此謂活而身死。)とある。

<sup>64</sup> 第2の謎は第39偈の「そもそもこの死体は一体全体生きているのか死んでいるのか」。第3の謎は第41偈の「この穀物の集積は食べても、(依然として)食べられるほどある」。『毘奈耶』(725c)に第3の謎解きとして「畑を耕す人が他人から穀物の種を借りて、それを有る程度食べて残りを撒くと、後で多く実る。貸し手がやって来て多くを返すよう催促すると返す。もし最初に食べなければ、より多くの穀物が実るだろう。人も同じで、十善によって人身を受けたが、もし悪を行い善を修しなければ、前世の善根はすぐさま消えてしまう。善根が消えてしまえば、善い境涯もなくなる。その反対であれば善い境涯が生じる。」(彼諸耕人、從他貸穀、食而作業。後時穀熟、積成大聚。債主來索、多並還他。如若先時、不食他物、便成大聚。人亦如是。由行十善、方獲人身。若更造惡、不修於善、前世善根、即便銷盡。善根尽故、亡失善道。与此相違、即不亡失。)とある。

<sup>65</sup> 蔵訳にはない。

<sup>66</sup> de Jong に従って、原典の vacanam priyam を vacanatrayam に訂正した。

<sup>67</sup> 第64偈の pāda cd は欠落している。

<sup>68</sup> 涙を流したのは父王。『毘奈耶』(725c)に「時王即便、抱持太子、哽咽涙流、告言。」とある。

その大聖仙の側で従者とともに出家を (pravrajyām) 得てから<sup>69</sup>、  
しばらくして彼は彼ら (出家者) の瓶や樹皮の (kuṇḍa-vaḥkala-: ril ba dang shing shun)  
集積を見た。(67)

そして彼は (それらの) 集積を嫌い、それらを見ないようにして (tad-adarśana-saṃvidā)、  
とても智慧のある彼はしばらくの間ひとりで人気のないところにいた。(68)

### 大臣の息子たちは資具を捨てると、王子と面会し教えを受ける

見ることと話しかけることを禁止する誓いに縛られていたが、  
偶然やって来た鹿に「よく来た (svāgatam: legs par 'ongs)。」と言って挨拶をした (papraccha  
kuśalam) <sup>70</sup>。(69)

彼によって再び供養され、鹿のようにふるまう (mṛgavratam: ri dags kyi brtul zhugs) 聖  
仙を<sup>71</sup>見て、

大臣の息子たちは皆恥じいって (vilakṣāḥ: skyengs par gyur pas) 考え込んだ。(70)

「鹿と鹿のようにふるまうこの人は、二人とも供養されたが、(どちらも) 何も所有して  
いなく (niṣparigrahau: yongs 'dzin med pa)、

黒鹿の皮もつけず (anajinau)、杖 (daṇḍa-: dbyug pa) や必要支具 (saṃbhāra-) の集まり  
もない<sup>72</sup>。(71)

このために (王子である) 彼によって我々が謁見することが禁止されたのだ (niyamah)。  
確かに制戒の必要資具に執着している者から彼 (の王子) を遠ざけるべきだ。」(72)

このように考えると、彼らは皆、制戒に対して余分な<sup>73</sup>集積を

<sup>69</sup> 『毘奈耶』(725c) には、王子は城から程近い場所にいる五神通を具えた仙人のもとで500人の  
従者とともに出家することを願い、許されると、教えを遵守した、程なくして五神通を得た「去  
城不遠、有一静处。五通仙人、稟性慈悲、哀憐一切。是時太子、与五百人、出婆羅痾斯。将諸侍従、  
至仙人所、求哀出家。時彼仙人、並隨其願。既出家後、勤教要法。太子不久、獲得五通。」とある。

<sup>70</sup> 『毘奈耶』(726a) に、太子が鳥と鹿を見て「よく来た。私の所作はお前のものとそっくりだ。  
お前は食を求め、満腹になれば足るを知る心が生じる。私もそうだ。」(善来野鹿、我今与汝、所  
作相似。汝所覓食、唯求満腹、生知足意。我所求食、亦唯満腹、作知足心。)と語ったとある。

<sup>71</sup> 誰を指すか不明。『毘奈耶』(726a) では、鳥と鹿に声をかけた後、能施というバラモンを見て、  
王子は彼が1枚の鹿皮の衣服と1個の器だけを持っているのを褒め称えた「能施、我今与汝、所  
作相似。汝唯持、一鹿皮衣一祭器。我亦同爾。汝所覓食、唯求満腹、生知足意。我所求食、亦唯  
満腹、作知足心。不同此处、更有余類、多畜皮衣、広停雑器、貯諸果菜、求覓疲労。)と語った  
とある。ただこの能施が鹿の真似をしたという記述は『毘奈耶』にはない。

<sup>72</sup> 原典の daṇḍasaṃbhārādambarojjhitau は、de Jong に従って、daṇḍasaṃbhārādambarojjhitau に訂正  
した。

<sup>73</sup> 原典は vratopacārasaṃcayam とあるが、de Jong は、vratopaskārasaṃcayam と訂正している。蔵語  
では brtul zhugs yod byad bsags pa kun となっているので、蔵語からサンスクリット語を構成する  
なら、vratopaskarasamcayam となる。ここでは、文脈上、upaskāra と訂正して訳した。

川の水の中に (vārāyām: chu yi klung du) <sup>74</sup>捨てて、清浄になり、彼のもとに行った。(73)  
家という地を捨てた <sup>75</sup>彼らの意向や意欲に (āsaya^anuśaya-: bsam pa bag la nyal dag la) ふ  
さわしい、  
本性を捉えることができると <sup>76</sup>、彼(の王子)はダルマの説示を (dharmadeśanām) した。 <sup>77</sup>  
(74)

### 過去世と現世の結合

その王子こそ私であり、釈迦族(の比丘たち)は大臣の息子たちである。  
この放棄の教えが (tyāga^upadeśo: gtong ba nyer bstan)、今また、再び私によってこれら  
の者たちになされたのだ。(74)

以上の、勝者自身によって語られた、このような釈迦族の息子の行動を、  
比丘の集団は理解すると、愛情に満ちた彼(の勝者)の、その最高の慈悲を (karuṇām:  
thugs rje) 讃えた。(75) <sup>78</sup>

以上がクシェーメンドラが著作したボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター  
のムーカパンダ・アヴァダーナという名前の37章 <sup>79</sup>である。

<sup>74</sup> de Jong は vārā を「水」を意味する女性名詞と理解している。

<sup>75</sup> 原典は tyaktvā grābhuvam であるが、de Jong に従って tyaktagrābhuvām と訂正した。ただし、  
蔵語では、'dzin pa spangs pa de dag gis 「所有を捨てた彼らによって」となっているので、grāha を  
grāha と理解したと考えられる。

<sup>76</sup> 原典の sa dhātuṃ (=khams) prakṛtiṃ (=rang bzhin) jñātvā (=mkhen nas) の訳し方が不明。別の  
テキストでは sadhātuṃ prakṛtiṃ もある。de Jong は sa dhātuṃ と理解する。

<sup>77</sup> 『毘奈耶』(726a) に「彼らは1枚の鹿皮の衣と1個の雑器だけを持ち、余分な資具を河の中に  
捨てて、師の下に行く。師は彼らの機根を観察して、法を説いた。彼らはみな五神通を得た。」(宣  
著一鹿皮衣、雑器各一。衆共許可。各以雑物、棄彼河中。唯一供身、俱詣師所。師觀根器、而為説法。  
皆証五通。)とある。

<sup>78</sup> 韻律は Mālabhāraṇī。

<sup>79</sup> 蔵訳では第38章となる。

## 作例解析

### 1. 『ムーカパング・アヴァダーナ』の作例について

本章で説かれるアヴァダーナに並行する文献は上記の解説に述べた通りである。これらの文献に関連する絵画やレリーフなどについては、古代インドに遡って作例が発見されるほど古くからある。またインドやチベットのみならず、中央アジアのキジルや、スリランカ、ミャンマーからも作例が見出だされる。本稿ではこのような地域における作例の、それぞれの典拠を詳細に論ずることはしないが、作例の制作年代から推察するに、上述した『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』に先行する文献などに基づいているのは確かである。ここでは各地域の作例を挙げてから、蔵訳に基づいて表された軸装の絵画（タンカ）について解析を行う。

おそらく現存する最古の作例が、インドのパールフットにある「ムーカパング・ジャータカ」を表す浮彫である。このジャータカは円の中に表されており、全体を四部分に分け、話は左周りに展開する。円中の左上に王宮とその前に子供を抱く王、左下に四頭の馬からなる馬車（人は乗っていない）、右下に身をかがめて土を掘る男とその傍らに胸を手に当てて立つ王子、右上に森の中で説法する行者と合掌する人々を表す。土を掘る男が表されているので、王子を穴に埋めようとする要素を含むジャータカに基づくと考えられる。カニンガムによれば、この浮彫には碑銘があり、“Mugaphakaya Jataka”あるいは、“Muga pakaya Jataka”と読めるとする<sup>80</sup>。

スリランカの例はポロンナールワから発見されている。ポロンナールワ遺跡群のティヴァンカ堂の壁面にパーリ語の『ジャータカ』に同定される「ムーガパッカ前生物語」が表される<sup>81</sup>。数本の高木を背景にしてムーガパッカ（ムーガパング）が立ち、向かい合って立つ女神と話をしようである。その後ろに馬と車輪がついた荷車があるため、処刑のために車に乗せられて馭者に連行されるシーンを表すと考えられる。図中に女神が描かれていることから、女神に教えを受ける要素を持つ話に基づくと考えられる<sup>82</sup>。

中国の新疆ウイグル自治区にあるキジル石窟にも「ムーカパング・アヴァダーナ」に関連する壁画がある。それは第38窟主室窟ヴォールト天井の左部分の菱形の区画のう

<sup>80</sup> Cunningham, Alexander, Sir. *The Stupa of Bharhut : A Buddhist Monument Ornamented with Numerous Sculptures Illustrative of Buddhist Legend and History in the Third Century B.C.* Allen 1879, 58, PLATE XXV4.

<sup>81</sup> 講談社出版研究所（編）『世界の聖域9 セイロンの仏都』、講談社、1979年、Plate 63. および、肥塚隆・宮治昭（編）『世界美術大全集 東洋篇第14巻 インド（2）』小学館、1999年、Plate 135.

<sup>82</sup> 上述の解説中の（1）パーリ『ジャータカ』（第538話）を参照。

ちの一つに描かれる<sup>83</sup>。この場合は一景のみの表現で、棺の中に横たわる男とその傍らに二人の男性を表しており、口がきけない王子を深い穴に埋めようとした「太子慕魄本生」と同定されている<sup>84</sup>。

ビルマ（現在のミャンマー）の古都パガンからも関連する壁画が見つかっている。パガンには無数の建造物があり、その内部を壁画で荘厳するため、ジャータカを表す作例は非常に多くある。そのうちで既発表の作例を参照すると、ローカテイパン寺院祠堂西壁の壁画作例を挙げることができる<sup>85</sup>。横に長い帯状の区画が複数の層となっており、その一部に他のジャータカとともにムーカパングの逸話が描かれている。ビルマ語の銘文を伴っていることから、歩けない王子が馬車で連れ出されるシーンと、王が王子を礼拝するシーンを表すことが分かっている。他にも19世紀に同定されるポーカラー寺院の壁画にも同じ主題の壁画があると発表されている<sup>86</sup>。

## 2. チベット絵画における作例解析

これまでに発表した翻訳と作例解析で、チベットにおける『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター』に基づく複数の絵画セットについて明らかにしてきた<sup>87</sup>。それぞれの絵画セットの概要については既発表の翻訳を参照されたい。本稿でも「41幅のタンカ」と、同じ系統にある「ナルタンのタンカ」、および全く異なる系統にある「シトゥのタンカ」を解析する。

### 2.1 「ナルタンのタンカ」における同定<sup>88</sup>

「ナルタンのタンカ」では、「右12」とされるタンカの上部に「ムーカパング・アヴァダーナ」の情景を示す（図1）。釈迦牟尼座像の頭上に楼閣を描き、その左側にドリン（石碑を模した碑）があり、その中に第38章ムーカパング・アヴァダーナ」と記される<sup>89</sup>。

<sup>83</sup> 平凡社・文物出版社（共編）『中国石窟 キジル石窟 第一巻』平凡社、1983年、図129 220頁。

<sup>84</sup> 上述の解説中の（2）『六度』（3）『慕魄』（4）『墓魄』を参照。

<sup>85</sup> 大野徹・井上隆雄『パガンの仏教壁画』講談社、1978年、図版42, 43, 44。

<sup>86</sup> 同上、図版234。

<sup>87</sup> チベットの絵画セットの一覧については以下を参照されたい。引田弘道・大羽恵美「ゴースラ物語『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルバラター』第35章和訳」『愛知学院大学文学部紀要』46（2016）、37-54。

<sup>88</sup> 本稿ではニューデリーの Tibet House Museum 所蔵の「ナルタンのタンカ」を参照した。展示中であつたタンカを実見することで、全てのタンカが木版画に色づけした複製ではなく、複数の絵師が筆で下絵を描いて完成させた絵画であることを確認した。さらにほかの「ナルタンのタンカ」と比べて赤字で書き込まれるチベット語銘文の量が多いことが確認でき、その銘文を参照することでアヴァダーナ中のシーンの同定がより詳細にかつ正確にできるようになった。

<sup>89</sup> “Yal 'dab sum cu rtsa brgyad pa lkugs pa 'phye bo'i rtogs brjod”「第38章ムーカパング・アヴァダーナ」

その右の屋根付きの建物の右に釈迦牟尼が弟子たちに囲まれて説法をする姿が描かれる(図2右: 図1の中央上部分)。これがこの物語の冒頭部の、祇多林の釈迦の姿である<sup>90</sup>。図2の左で楼閣の左に隣接する離れ家の中には女性が赤ん坊を抱いている様子を二回表している。ウダカが生まれたのと、同時に大臣たちに息子が誕生したことを表すようである。さらに中央の楼閣の右下には小さな子供が立っており、その両側に二人の人物が子供を支えるように表される(図2右下)。彼らがいるのは上に表される釈迦牟尼説法図の場所と地続きで、六角形の模様が施された水色の床の上である。本来は名前の由来となった、王子が水の中で生まれたとする誕生のシーンを表すはずであるが、水辺の表現が見られない。タンカ上部中央に戻ると、楼閣の中にはウダカがムーカパングと呼ばれるようになったエピソードが示される(図2中央)。

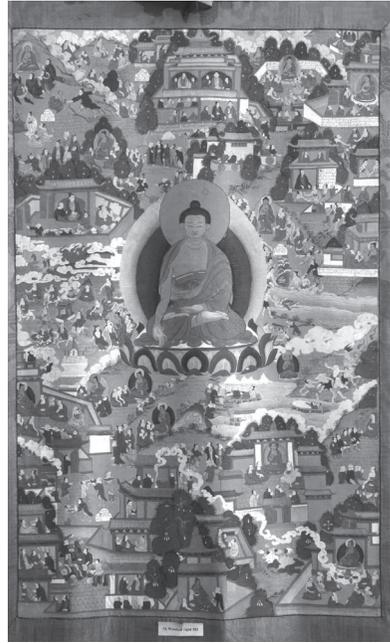


図1 「ナルタン」のタンカ  
Tibet House Museum 蔵 「右12」



図2 「ナルタン」のタンカ(図1 中央上部分拡大)

<sup>90</sup> 銘文にあるのは判読可能な限り以下の通り。Rgyal byed tsal du sha kya'i rgyal po mnam rab tu[byung] zhing rdzas la mngon par sred pa bzlog pa'i phyir zla ba gsum su dang mi 'jal bar bzhugs shing lkugs skyes pa'i rab gsungs pa /.

「祇多林で勝者釈迦は、出家後の物に対する欲望に打ち勝つために、三か月間誰とも会わずに独住し、ムーカパングの話をされたこと。」

建物の一階の赤い壁部分には白字で、ヴァーラーナシーのブラフマダッタ王のところに水の中で誕生したウダカという名の王子がおり、過去の苦悩を覚えているがゆえに愚者のふりをしたことが記される<sup>91</sup>。また、建物の二階の壁部分には、医師によって、恐怖を与えれば話すようになるという診断を下したとする銘を書き込む<sup>92</sup>。

障碍を克服させるために王は王子を処刑場に送り、その道中で王子は初めて言葉を発する。それを聞いた馱者は王のもとに王子を連れ帰るが、そこで彼は頑なに口を閉ざしてしまう。王によって再び処刑場に送られることがさらに二回繰り返される<sup>93</sup>。最初に王子は荷車の中で、ヴァーラーナシーに生きている人がいるかどうかを尋ね、二回目に処刑場の死体の生死を尋ね、三回目に種の集積が多くあるという発言をする。この三つ



図3 「ナルタンのタンカ」(図1中央上部やや下部分拡大図)

<sup>91</sup> Sngon wa ra ña sir rgyal po tshangs sbyin la chu'i dkyil du bcos pa'i bu chu skyes zhes pa sngon dmyal bar skyas pa drans pa? lkugs pa'i brdzu la brten par ming lkugs pa 'phed por grags pa / 「昔、ヴァーラーナシーのブラフマダッタ王のところに水の中で生まれたウダカという息子がおり、〔息子は〕以前に地獄にいたことを覚えており、口のきけないもののふりをしていたため、ムーカパング（口がきけない上に歩くことのできない障碍者）という名前で知られたこと。」

<sup>92</sup> Sman pas sdigs pa 'di smra bar 'gyur zhes pa / 「医師は恐怖を与えることで話すようになるということ。」

<sup>93</sup> 右の荷車の右隣りに銘文が記される。bsdigs pa re'i skabs tshig re smas pa grong dang 'bru phung mi ro nmams mthong ba wa ra na sir mi yod med gsos pa'i ro ram shi ba'i ro za rgyu am zos tshar ba'i 'bru zhes zer zhing slar lkugs par gyur pa / 「恐怖が与えられるたびに言葉を発し〔その内容は〕、町と穀物の山と死体を見て、ヴァーラーナシーに人がいるのかいないのか、生きている死体か死んだ死体か、食べても穀物〔がある〕と言ったが、再び口がきけない者になってしまうこと。」

のシーンが中央の楼閣の下の左右に表される(図3)。本タンカでは車を引く馬や牛は描かれておらず、箱状のものに車輪を付けた荷車のみ表される。右側と中央に描かれる二つの馬車が最初と二回目の発言のシーンを表すが、いずれもどちらか同定しにくい。三回目の種の集積についての発言は左に描かれた荷車とその中の王子によって示される。荷車の前に白い山積みになった種が置かれていることから同定可能である。

父王から出家の承認を得た王子は大臣の息子たちを連れて森に向かう。荷車で出かけるシーンの左の種の山のすぐ下に王子が数人の従者を引き連れている様子が描かれている(図3左)<sup>94</sup>。ここでは王子や従者はすべて俗人の姿で、着物を着用し髪を結っている。彼らが出家したとされる場面が図4上中央の一人の出家者に三人と四人の出家者が合掌する場面が二回表される箇所に対応する<sup>95</sup>。大臣の息子たちが木の皮を集積したのでムーカパングはそれを嫌い独居するようになる<sup>96</sup>。人気のないところにいたムーカパン



図4「ナルタンのタンカ」(図1中央上部左部分拡大図)

<sup>94</sup> 王子たちの足元に銘文が記される。lkugs phyé blon po'i bu'i tshogs bcas nags khrod du 'gro ba / 「ムーカパングは大臣の息子たちを伴って林に行くこと。」

<sup>95</sup> 二つの集団の間に銘文が記される。lkugs phyé blon po'i bu dang bcas rab tu byung ba / drang srong chen po ..... sar 「ムーカパングは大臣の息子たちとともに出家する。大聖仙のところで〔判読不可能〕」

<sup>96</sup> 森に向かう王子一行の左上の樹木の左に銘文が記される。blon po'i bu nams kyis shing shun ril ba sogs gsogs 'jog byas pas lkugs phyé ('phyé) gcig por gnas pa / 「大臣の息子たちは木の皮や水瓶などを蓄えていたのでムーカパングは独居すること。」

グのところには鹿などの野生動物 (ri dvags) がやってくる。図4の中央上の出家者と合掌する人々の下に、出家者が坐し二匹の動物と向かい合う場面が示される。「ナルタンのタンカ」での絵解きはここで終わっていて、大臣の息子たちが不要なものを川に捨てるシーンなどは表されない。

## 2.2 「41幅のタンカ」における同定

「41幅のタンカ」セットの中で「右15」とされるタンカの下部に本説話が表されている(図5)。タンカの右下隅には堀で囲まれた水を湛える区画があり、その中に小さな子供の立像とそれを支える大人の人物が両側に描かれている(図6右下:図5の右下部分)。このシーンは水の中での王子誕生のシーンであろう。その左側に「ナルタンのタンカ」と同じ楼閣があり、その左に離れ家を描く(図6左中央)。上記同様で、離れ家には二部屋でその中にはそれぞれ赤子を抱く女性を表す。王子の誕生と、同時に生まれた大臣の息子たちを養育するシーンであろう。上述した「ナルタンのタンカ」による同定に従えば、図6中央の楼閣の中に



図5 「41幅のタンカ」 no.15

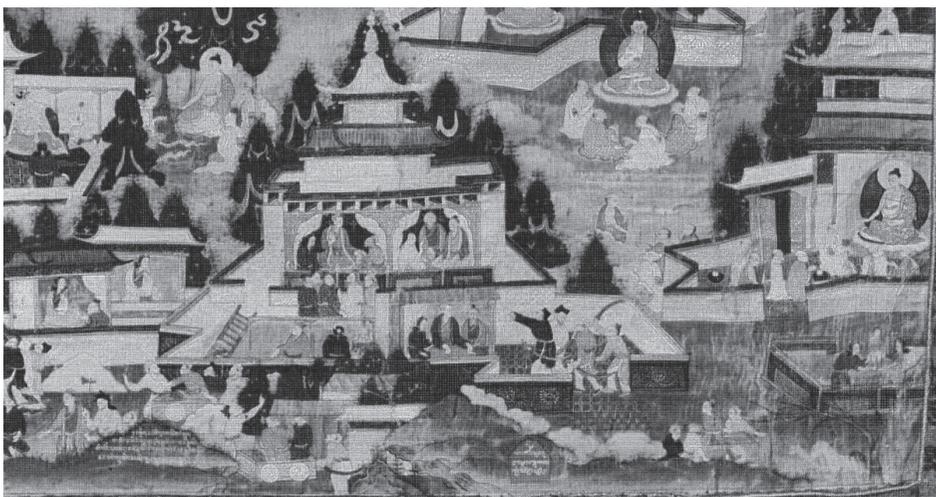


図6 「41幅のタンカ」(図5下部分拡大図)

描かれる場面はウダカが言葉を発せず、立つことのできない障碍を持つ者のふりをする様子が描かれると考えられる。楼閣の下と右下に荷車が描かれ、王子が処刑場に連行される場面を表す。楼閣の左下には荷車と白い種が積まれた山があるので、この箇所は三度目に処刑場に連行され、種が多くあるとの発言をした場面である。その左で、種の山を背にして王子と大臣の息子たちが森に向かうシーンを表す(図7右)。その左下で画面の縁にあたる箇所に川を表し、そのほとりに五人の出家者が立っている。これは出家後に木の皮などを集積した従者たちが川の水の中に不要なものを捨てるシーンであると見られる。



図7「41幅のタンカ」(図5下部左部分拡大図)

### 2.3 「シトゥのタンカ」における同定

「シトゥのタンカ」では第34章から第38章までが描かれるタンカに表される(図8)。タンカの下部四分の一ほどが全て本アヴァダーナの情景を示す。タンカの右隅下には蓮が咲き水鳥が遊ぶ方形の池があり、その縁に赤子を抱く女性が表される。これはブラフマダッタ王の王妃ブラフマヴァティーがウダカ(後のムーカパング)を出産したシーンであろう(図9右下:図8の下部)。その上の建物の中が示されるうちの左下の部屋には女性と子供が一人描かれている。ウダカが成長して、障碍を持ったふりをするシーンを示すものと見られる。そこで王は医者たちに王子の病気の診断を命ずる。それがこの建物のうち右の部屋の中の四人の男性が描かれる箇所であると考えられる。そして王は王子を処刑場へ送る。それが建物の左に描かれる、二頭の馬に引かれる荷車に二人の男性が乗り込むシーンで、一人が馱者でもう一人がウダカ改めムーカパングである。そこでムーカパングは馱者に間を発する。話すとができると知った馱者はムーカパングを王のもとへ連れて行く。そのシーンが



図8「シトゥのタンカ」

話すとができると知った馱者はムーカパングを王のもとへ連れて行く。そのシーンが

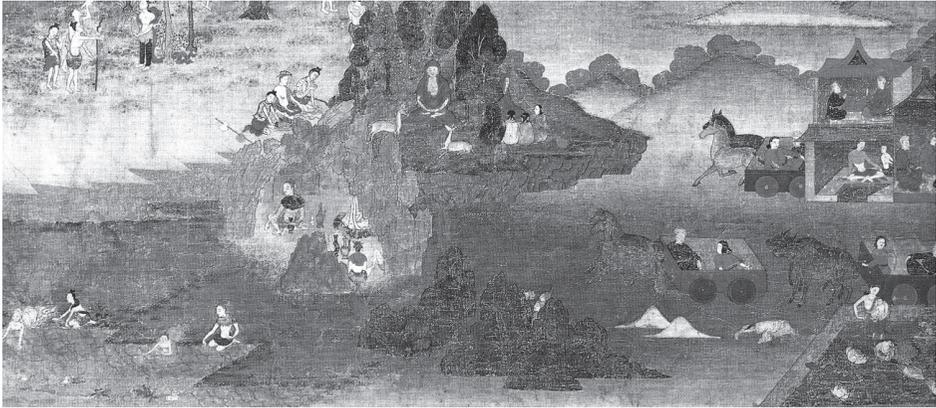


図9「シトウのタンカ」(図8下部分拡大図)

表わされるのは建物の二階の部屋の中で男性が二人描かれている部分であろう。王の前で話すことをしないムーカパングは再び処刑場に送られるが、それが池のすぐ上に描かれる荷車である。二度目に処刑場に連れられて行った時に、ムーカパングは処刑場の死体の生死を尋ねるのであるが、そのシーンは池の上に描かれる荷車を引く馬（牛のようである）と左下に人間が横たわっている箇所に表示される。再び彼は王の前に連れて行かれ、絵画中では先の建物の二階のシーンに戻るのだが、やはり言葉を発しないため再び処刑場に連れて行かれる。それが池の左上に描かれる箇所で、彼は種の集積について発言しており、その種が二つの山になって馬の左下に表される。再び建物の二階の部屋の男性二人が向かい合うシーンに戻るのだが、この部分は王が王子の出家を許すシーンも示しているのであろう。出家を許された王子は大臣の息子たちと森に向かう。それが図9中央下の山が描かれている箇所に表され、その山の背後に王子と数人の従者の頭を表す。そして、出家したにも関わらず、大臣の息子たちは瓶や樹の皮の集積をする。それが先の山の左上で、山を穿って洞穴となったところに修行者が座り、多数の瓶が並び、山になって積まれた樹の皮が表されている。ムーカパングは集積を嫌い、独り離れているところへ鹿が訪ねてくる。それが物を集積する出家者の右上の樹に囲まれた台地となった箇所で、ムーカパングが禅定して坐し、その前に二頭の鹿を表す。出家者である大臣の息子たちは恥を知って、余分なものを川の中に捨て去るが、その場面は左下の川とそのほとりの四人の人物像によって示されると推測している。しかしこの人物像のうち二人は王子を表している可能性もあり、銘文などを確認しなければならない。このことを知ったムーカパングは彼らに法を示す。そのシーンは禅定するムーカパングの右隣（台地の右上部分）に示される。

これまでの発表と同じく、シトウのタンカではアヴァダーナの「果」となる釈尊と同時代のエピソードを絵画中に含まない。そのため、翻訳文中の冒頭部にある釈尊がシャ

カ族の王子たちの蓄えに嫌悪して、不謁見の命令を出したという挿話は描かれていない。

### 3. まとめ

「ナルタンのタンカ」銘文を参照しながらタンカに描かれる全てのシーンの同定を行った。これまでも指摘しているが、「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」はどちらかを手本にして描かれた可能性がある。今回見た限りでは、誕生のシーンが「41幅のタンカ」では水辺の表現を用いて水の中で生まれた王子の姿を正確に表しているのに対して、「ナルタンのタンカ」では誕生のシーンと同じ構図を持つ図において、王子と従者の足元に水を表さずに床を表していた。この点については、テキストを読まずに他の絵などを手本として絵を描いたことが指摘できるだろう。「41幅のタンカ」が「ナルタンのタンカ」に先立って成立したことが考えられる。

本説話でも「シトゥのタンカ」は上記の二つのタンカセットと類似する箇所は見られなかった。タンカに表すシーンの選択も異なっている。同じ文献を典拠として描きながら様式も表し方も全く異なる系統にあるタンカセットである。

#### 参考文献

- Forty-one Thangkas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama: Past Lives of the Buddha.* 1980. Paris: Editions Sciaky.
- Padma-chos-'phel, Deborah L. Black, and Kṣemendra. *Leaves of the Heaven Tree: The Great Compassion of Buddha.* 1997. Berkley: Dharma Pub.
- Rhie, Malylin M. and Thurman, Robert A.F. *Worlds of Transformation: Tibetan Art of Wisdom and Compassion.* 1999. Harry N. Abrams [distributor].
- rTogs brjod dpag bsam 'khri shing gi snyan tshig gi rgyan lhug par bkrol pa mthong ba don ldan.* 1981. Delhi: Karmapae Chodhey.

#### 図版出典

- 1 Tibet House Museum 提供の画像ファイルを画像処理して作成
- 2 筆者（大羽）が Tibet House Museum における現地調査で撮影した画像を画像処理して作成
- 3、4 図2部分図
- 5 Sciaky 版 (Forty-one Thangkas 1980) 通し番号15
- 6、7 図5部分図
- 8 (Rhie and Thurman 1999) 148頁
- 9 図8部分図

本研究は JSPS 科研費基盤研究 (C) 「『アヴァダーナ・カルパラター』を中心とした仏教信仰の諸相」(平成26-28年度、課題番号: 26370058、代表: 引田弘道) の成果の一部です。

